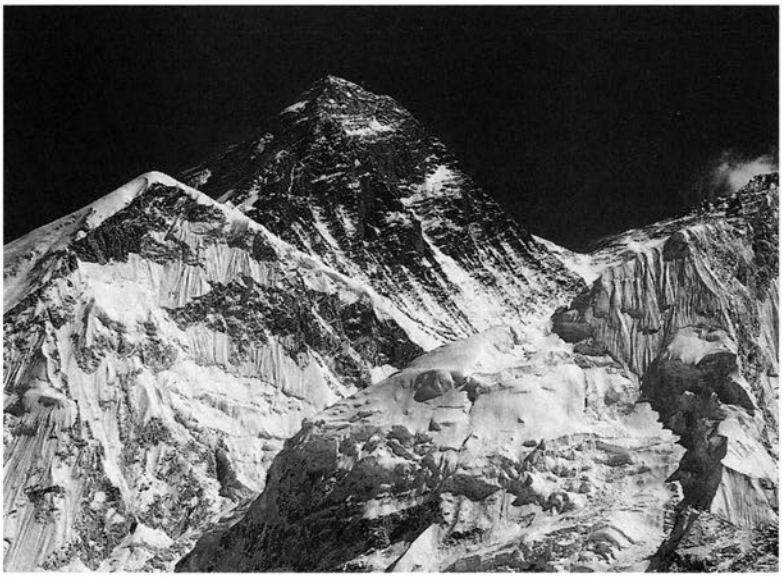
山　667－2000・12・20（第三種郵便物認可）
第667号平成12年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

ヒマラヤ登山の20世紀

日本ヒマラヤ協会　山森欣一



エヴェレスト登頂者にも中高年が増加している

筆者は、ヒマラヤ登山愛好者のひとりとして二十一世紀を迎えるに当たり、日本のこれまでのヒマラヤ登山をまとめた「日本ヒマラヤ登山通史」の必要性を痛感し、及ばずながらその概要をＨＡＪ機関誌に連載する決意であった（開始は明年春の予定）。

この度はからずも編集人から「二十世紀日本のヒマラヤ登山のまとめ」の依頼があり、適任とは思われないが、日頃会の行事にも参加しない一不良会員の義務として引き受けることにした。しかし、「山」の紙面の量的なことも考慮して七～八千メートル峰登山を中心にした形式で戦後のヒマラヤ登山の概観をまとめてみた。ご了解いただきたい。また数字は、おおよそのものであること、登山の価値と文章はすべて筆者の考え方であり、責任をもって執筆したものであることをお断りしておく。

■戦前のヒマラヤ登山

戦前のヒマラヤ登山で実現したのは、立教大学隊（堀田弥一隊長）のナンダ・コート（七八六一メートル）だけであったが、もちろん他の大学も手をこまねいていた訳ではない。ヒマラヤ登山にたどりつくまでの登山の進展過程や各組織の動向については、安川茂雄著『近代日本登山史』（あかね書房）と山崎安治著『新稿日本登山史』（白水社）に詳しい。ここでは三つの出来事について触れたい。

一九一五年（大正四）慶応義塾山岳会が創立され、二一年、槙有恒がアイガー東山稜を初登攀した。二四年暮れ頃、槙は霞ヶ浦海軍航空隊に副長兼教頭の山本五十六を訪ねヒマラヤ登山の参考にするため、高々度用酸素マスクを見せてもらった。翌

2000年（平成12年）
12月号（No. 667）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円

目　次

ヒマラヤ登山の20世紀……1
日韓学生友好登山……7
海外の山……8
報告
総務委・第31回新入会員オリエンテーション開催……9
自然保護委・北高尾の森づくり 9
資料委・山岳博物館連絡会議 10
フィルムビデオ委・「雪の薬師、槍越え」上映……10
東北自然保護のつどい……11
支部だより……12
山陰支部　宮崎支部　青森支部
東西南北
エベレスト登頂とタイムカプセル14
シャモニの正しい発音とラスキンについて……15
慈恵医大山岳部70周年……16
モンゴルブルーの空……17
ウェストン肖像写真の謎……18
山岳博物館散歩・8……17
図書紹介……19
図書受入報告・新入会員……20
会務報告……21
会員異動・ルーム日誌……22
INFORMATION……23

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 ……10～20時
水・金 ……13～20時
第2、第4土曜日 ……閉室
第1、第3、第5土曜日‥10～18時
▶ルーム年末年始休み ……12月29日～1月8日

二五年、槙らがカナダのアルバータ（三六一九メートル）に登頂した。

一九二七年、長谷川伝次郎がカイラスを巡礼、翌年ナンガ・パルバットを周遊した。長谷川は三〇年十一月、JACの小集会（九十余名）で「ヒマラヤの旅」の講演を行った。この話を聞いた立教大学の堀田弥一は、三日間長谷川家に通い詳細に聞き「我々の冬山の経験で六千メートル以上の未踏の山を登頂できないことはない、と直感した」。加藤泰安もまたこの講演を聞いた夜、興奮のため眠れなかった。

一九二九年、ドイツ隊がカンチェンジュンガに挑戦し、パウル・バウアーによって書かれた報告書（Im Kampf um den Himalaya）が三一年に出た。この本を読んだ京都大学の今西錦司らはヒマラヤへ行く同志の結合をはかる必要を感じAACKを設立し、富士山で極地法登山を展開するなど精力的に活動したが、結局戦前には彼らのヒマラヤ登山は実現しなかった。この年二月、JACの小集会（四十余名）で二九年と三〇年のカンチェンジュンガ遠征について、松方三郎と浦松佐美太郎が講演を行った。このようにしてみると、ドイツのカンチェンジュンガ遠征が、戦前の日本のヒマラヤ登山熱の引き金になったことは間違いないようだ。

■戦後のヒマラヤ登山

一、一九五二―一九六五

［初登頂時代］

戦後のヒマラヤ登山は、一九五二年のマナスル偵察から始まった。五六年マナスル初登頂からネパールが一時ヒマラヤ登山を禁止する六五年までの登山は、「初登頂」がテーマであった。標高七千メートル以上の峰の初登頂をあげると、チョゴリザ北東峰（五八京大）、ノシャック（六〇京大）、ヒマルチュリ（六〇慶大）、アピ（六〇同志社大）、チャムラン（六二北大）、サルトロ・カンリ（六二京大）、バルトロ・カンリ（六三東大）、サイパル（六三同志社大）、ギャチュン・カン（六四長野）、アンナプルナ南峰（六四京大）、グレイシャー・ドーム（六四千葉）、ゴジュンバ・カンⅡ（六五明大）などがある。

もっとも戦後初のヒマラヤ登山に名乗りをあげたのは、一九五一年の福岡山の会であった。目標はシッキム・ヒマラヤのトゥインズ（七三五〇メートル）で五二年実施予定でJACに後援依頼したが、JACはこれを断った。結局この計画は陽の目を見ることなく消えた。

この時代の特徴は、外貨取得に制限が設けられていたことであった。今のように誰もが自由に外国へ行ける時代ではなかった。登山は、一般旅行よりはるかに多額の外貨を必要とする。このため厳しい審議を経て選ばれた隊だけが夢を実現できたのであった。当然のことのように大学の登山隊が有利であった。前掲した初登頂の中では、ギャチュン・カンとグレイシャー・ドームの二つだけが大学の登山隊ではないことがそれを裏付けている。

二、一九六六―一九六九

［ヒンズー・クシュの時代］

歴史は皮肉である。東京オリンピックで日本の経済は飛躍的に成長し、外貨も制限つきながら自由化され、さあ、これからヒマラヤ登山を！と思っていた登山者たちを待っていたのは、ネパールの登山禁止の現実であった。ヒマラヤを夢見て意気込んでいた登山者は行き場を失った。しかし、登山者の立ち直りも早かった。行き先は三つに分かれた。岩壁登攀を目指すものは、当然ヨーロッパ・アルプスに殺到し「三大北壁狂騒」が繰り広げられた。高峰組はアンデスとヒンズー・クシュに分かれた。その頃のアンデスは遠かった。それでもいくつかの見るべき成果があった。

キスリングを担いでヒンズー・クシュに向かった登山者たちこそ幸せだったかもしれない。ネパールやカラコルムに比べるとやや小振りながら、憧れていた「ヒマラヤ」の高峰が面白いように登れた。吉沢一郎は、『山と渓谷』の六七年十月号「ヒンズー・クシュ　最近の話題」の中で、現地からの情報として日本隊は十六隊と紹介し、［こうみると数だけは日本が一番多く、全体では三十隊になる。ヒンズー・クシュはこのところ、アンデスも顔負けのありさまということになろう］と書いている。六七年には一橋大学隊がサラグラール南峰とウドレン・ゾム南峰、新潟大学隊がランガール南峰の初登頂を行い、千葉岳連隊がティリチ・ミールに登頂した。

残念なことが一つある。ネパールの登山禁止を受けて実現したヒンズー・クシュ登山の中には、今でいうアルパイン・スタイルに近いシンプルな登山もあった。にもかかわらず七〇年ネパール登山が解禁になると、再びこの方法が忘れられてしまったのである。ネパールの登山禁止がもう少し長引いたらあるいは、登山者の世代交代とも絡めてシンプル登山が定着したかもしれない。

三、一九七〇年代

［第二登、バリエーションの時代］

多分この時代が、日本のヒマラヤ

登山界におけるアルピニズムの最盛期であったろう。それは五〇年代以降に日本で主流になった閉鎖的な色合いを持ったアルピニズム線上のものではあったが。

六四年、最後の八千メートル峰シシャパンマが中国隊によって登られ、登山の世界のオリンピックは終わった。そしてネパールは登山禁止となった。

ネパール登山が再解禁されると満を持していた日本隊は堰を切ったようにネパールに殺到した。八千メートル峰では、世界最高峰・エヴェレストの日本人初登頂（七〇ＪＡＣ）、女性初登頂（七五）が記録された。マナスルでは、八千メートル峰女性初登頂（七四）もあった。七〇年春、ＪＡＣ東海がマカルーを困難な南東稜から初登攀し、これが同峰の第二登となった。同年秋にはダウラギリ主峰が同志社大によって第二登された。翌七一年、東京都山岳連盟隊は、マナスル西稜を初登攀しこれも同峰第二登となる。七八年にはイエティ同人隊によってダウラギリ主峰の困難な南稜が初登攀され、秋には同峰の長大な南東稜を群馬岳連隊が初登攀した。七九年にはアンナプルナ主峰が静岡隊によって行動用酸素なしで登頂された。

七千メートル峰では、六九年グルジャ・ヒマールが富山隊によって初登頂され、七〇年には、マナスル三山の最後の山ガディ・チュリ（Ｐ29）が阪大隊によって初登頂された。翌七一年にはチューレン・ヒマールを静大が初登頂したが、この年ネパール・ヒマラヤで日本隊の遭難が相次ぎ「推薦状発行基準制定」の引き金となり、以後日本隊の足かせとなる。七三年山学同志会隊がアンナプルナⅡに登頂。七五年には多くの登山隊を退けてきたダウラギリⅣ峰が大阪岳連隊によって初登頂された。七六年には怪峰といわれたジャヌー（現名クンバカルナ）の最難関・北壁が山学同志会隊によって攻略された。七八年に入るとヒマルチュリが南西面から雪と岩の会隊によって、ダウラギリⅡの東稜が名古屋山岳会隊によって初登攀され、ガネッシュ・ヒマールⅣ（労山）、同Ⅱ（岡大・現在Ⅲ）、ランタン・リルン（大阪市大）が初登頂された。七九年には、カモシカ同人隊がダウラギリⅡ～Ⅲ～Ⅴの交差縦走に成功。

一方、パキスタンの八千メートル峰では、七七年、日山協隊が南東稜からＫ２の第二登に成功した。当時心ないマスコミに「修学旅行」と揶揄されながらも七人の登頂者を送り込んだことは評価されるべきだろう。同年愛知学院大隊がブロード・ピーク主峰の第二登に成功した。七千メートル峰では七一年、静岡登攀クラブ隊がサラグラール南峰の西壁で困難な壁を初登攀した。七九年には早大隊がラカポシ北稜を初登攀。

カラコルムは七五年以降日本隊が席巻し初登頂に成功した。カンピレディオール（広島）、マルビティンＣ（ＪＡＣ岩手）、Ｋ12（市川）、テラム・カンリ（静大）、七六年、アプサラサス（阪大）、シンギ・カンリ（東北大）、シェルピ・カンリ（神戸大）、スキャン・カンリ（学習院大）、七八年、パスー（現シスパーレＥ防大）、バトゥラⅡ（現ⅢＨＡＪ）、七九年、クンヤン・チッシュＮ（北大）、プマリ・チッシュ（北海道岳連）、ラトックⅠ（京都）、テラム・カンリⅢ（弘前大）、ルプガール・サールＣ（法大Ⅱ）など壮観である。

その他の地域を見ると、インドでは七六年ＪＡＣがナンダ・デヴィ主峰と東峰の縦走に成功。七八年、トリスルの南稜をＨＡＪが初登攀した。旧ソ連では六九年松本龍雄、七四年新潟大がレーニン峰に登頂した。七六年ＪＡＣ隊がコムニズムとコルジェネフスカヤに登頂した。

四、一九八〇年代［二極分化、ハンディ・キャップの時代］

七〇年代に日本の経済が高度成長を続けると、社会の中には個人を主張する若者たちが増加し、山の世界にも浸透し始めた。束縛を嫌い気の合った者同士が気楽に手軽に登山を楽しむための「同人」なるものが流行り、結局、社会人山岳会も大学山岳部も凋落の一途をたどることになる。

しかし、多くの同人は結局社会人山岳会の域を出ることはなく、歴史が新しいだけに消えてゆくのにも時間がかからなかった。残ったのは組織登山に必要な「リーダー・シップ」や「メンバー・シップ」の育成の場の欠落という現実だけであった。

しかし、この時代に急速に進展した「個人」意識は、登山の本質に立ち返ろうという一群の登山者をも生み出した。これらの登山者は、シンプル登山の実践や、より困難な条件を課す登山を目指した。岩登りにおけるフリー化、高所登山におけるアルパイン・スタイル、標高八千五百メートル級の山における無酸素登山などである（これらを総称してハンディ・キャップと呼ぶ）。一方ではヒマラヤ登山の大衆化が進み、ネパールのトレッキング許可ピークは大勢のヒマラヤ登山愛好者であふれ返った。こうしてヒマラヤ登山の二極化が一気に進んだ。

一九八〇年、山学同志会隊がカン

チェンジュンガの未踏ルートである北壁を無酸素で初登攀した。八一年には禿博信が単独、アルパイン・スタイルでダウラギリ主峰に登頂。八二年には北大がダウラギリ主峰に冬期初登頂し、イエティ同人隊はサガルマータに冬期登頂。

しかし、これらの隊にも少なからず指摘される面があった。同志会隊はＨＡＰ（ハイ・ポーター）使用、禿は春の隊の残置固定ロープ使用、北大隊は十月に北東コルへ荷揚げなどである。そして加藤保男は厳冬のエヴェレストから帰らなかった。

八二年、中国のチョゴリ（Ｋ２）登攀を一任された同志会の小西政継はＨＡＰ抜きで「自己管理登山」を提唱し無酸素登山を実施、七名の登頂者を出したが、一名が帰還できなかった。同年マカルーが同志会隊によって無酸素で登られる。シシャパンマを高山研究所隊がアルパイン・スタイルで挑んだが、登ったのは主峰ではなく北東稜をつめた中央峰であった。

八三年秋、エヴェレストの無酸素登山に二隊が挑戦した。山学同志会（川村晴一、鈴木昇巳）とイエティ同人（吉野寛、禿博信、遠藤晴行）で五人の登頂者を出したが、吉野と禿は帰還しなかった。八三年カモシカ同人隊が南東稜からエヴェレストに冬期登頂。

八五年になると山田昇が夏のＫ２と秋のエヴェレストを無酸素登頂し、余勢をかって冬のマナスルを斎藤安平とアルパイン・スタイルで攻略、登頂に成功する。この冬期マナスルで行われた登山が二十世紀のヒマラヤで行われた日本隊の最高の記録である。山田は八八年三国合同登山でエヴェレストを北から登り南へ下る縦走に成功したものの、八九年冬のマッキンリーで遭難し、日本はエースを失った。

八四年冬にアンナプルナ主峰の南壁を目指した群馬岳連隊は失敗したが八七年冬に雪辱した。しかし帰路二人が滑落死亡、その中の一人は冬期マナスルの斎藤であった。この頃既に冬の八千メートル峰を目指すものは群馬岳連だけとなっていた。無酸素登山やアルパイン・スタイル登山を試みる登山者はほとんど出現しなかった。

ネパールでは、八一年、イエティ同人隊がアンナプルナ主峰南壁に新ルートを開拓。同年ＨＡＪ隊がランタン・リに初登頂。八二年、カモシカ同人隊がダウラギリ主峰北面ペアールートを攻略し登頂。八三年、弘前大隊がネムジュン（かつてのヒムルン・ヒマール）に初登頂。同年カモシカ同人隊がローツェに登頂。八四年、ＪＡＣ隊がカンチェンジュンガ南峰～中央峰の縦走に成功。八一年ＨＡＪ隊が断念した八五〇〇メートルラインの縦走を完成させた。

中国領の高峰が解禁されたのは八〇年であった。その年、ＪＡＣ隊がチョモランマの北壁に新ルートを開いた。八一年には女子登攀クラブ隊がシシャパンマ主峰に登頂。コングールではアルパイン・スタイルで挑んだ三人が行方不明となり、八九年雪辱を果たすことになった。八三年から冬のチョモランマにカモシカ同人隊とウータンクラブ隊が数度挑んだが登頂は成らなかった。八五年、カトマンズクラブ隊がネパール政府の許可で中国側からチョー・オユーに登頂。これで日本人による八千メートル峰十四座全山の登頂が完了した。

そのチョー・オユーの中国側許可の第一号はカモシカ同人隊が取得、高橋和之が頂上からパラパント降下に成功した。中国は未踏峰の宝庫であった。七千メートル峰の初登頂は以下のとおり。カンペンチン（八二京大）、ポーロン・リ（八二大分）、ナムナニ（八五京大／同志社大）、クーラ・カンリ（八六神戸大）、ニェンチェンタンラ（八六東北大）、チョー・アウイ（八六ＨＡＪ）、カルジャン（八六ＨＡＪ）、ギャラ・ペリ（八六ＨＡＪ）、七一六七峰（八六東農大）、ラプチェ・カン（八七ＨＡＪ）、カント（八八同志社大）、スークァン・リ（八九大阪市大）。

パキスタンでは、八〇年、ベルニナ山岳会隊がガッシャーブルムⅡに登頂。八一年、長野山協隊がガッシャーブルムⅠに登頂。早大隊はＫ２西稜を初登攀。八三年、富山岳連隊がナンガ・パルバットに登頂。八六年には登歩渓流会隊の二人がガシャーブルムⅠ北面に新ルートを開拓。七千メートル峰の初登頂は、ジュトマル・サール（八〇東京志岳会）、ハチンダール・キッシュ（八二金沢大）、ウルタルⅠ（八四広島山岳会）。八一年、カンジュト・サール西壁を千葉工大隊が初登攀。八三年、京都岳人クラブ隊がマッシャー・ブルムをアルパイン・スタイルで攻略した。

インドでは、八四年待望の東部カラコルムがインドとの合同登山隊を条件として解禁された。日本隊ではＨＡＪ隊が先行し、八四年マモストン・カンリ、八八年リモーの初登頂に成功した。八五年サセール・カンリⅡＷも初登頂したが、日本側は登頂できなかった。

八〇年代に入ると、旧ソ連のパミールで夏に開催されている「国際登山キャンプ」は、緊急時の救援態勢があること、短期間で七千メートル

戦後の日本ヒマラヤ登山の概要

（1952～2000年＝49年間・6,000m以上の峰）

目標山岳高度別入山者数と死亡者数（2000年11月1日　山森欣一調べ）

＊入山者総数：1614隊　11,508人
＊死亡者数　：　149隊　　255人　（死亡率2.2%　45人に１人が死亡）

高度＼年代		1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年以降	合計（　）内は死亡率
8000m	人数	36	46	431	1042	1161	2716人
	死亡者数	0	0	18	32	17	67人（2.5%）
7000m	人数	62	264	1309	1552	1292	4479人
	死亡者数	0	5	28	44	32	109人（2.4%）
6000m	人数	28	213	908	1830	1332	4311人
	死亡者数	0	3	22	31	23	79人（1.8%）
合　計	人数	126	523	2648	4424	3787	11508人
	死亡者数	0	8	68	107	72	255人（2.2%）

＊8000m峰登頂者数の推移

［　］内は女性　〈　〉は40歳以上の中高年

1956～76年	（21年間）	＝ 18人	［4］	〈 1〉
1977～79年	（３年間）	＝ 20人	［0］	〈 0〉
1981年	（１年間）	＝ 20人	［1］	〈 1〉
1990年	（１年間）	＝ 30人	［3］	〈 3〉
1996年	（１年間）	＝ 40人	［6］	〈11〉
1997年	（１年間）	＝ 63人	［3］	〈16〉
2000年	（１年間）	＝ 28人	［1］	〈18〉

＊8000m峰複数登頂者　ベスト3

９座	12回	山田　昇		
８座	９回	名塚秀二		
６座	６回	田辺　治	山本　篤	谷川太郎
		石川富康	近藤和美	小西浩文

＊トータル獲得標高　ベスト3

135,257m	近藤和美	14座18回登頂
115,804m	山田　昇	11座14回登頂
95,825m	岩崎　洋	11座13回登頂

＊エヴェレスト登頂者数の内訳

年	合計	中国	女性	中高年	年	合計	中国	女性	中高年
1970	3	0	0	0	1991	2	2	0	1
1973	2	0	0	0	1993	6	0	0	1
1975	1	0	1	0	1994	4	0	0	2
1980	3	3	0	0	1995	2	2	0	0
1982	1	0	0	0	1996	7	6	1	4
1983	8	0	0	0	1998	15	15	1	8
1985	7	0	0	1	1999	2	1	0	0
1988	5	5	0	2	2000	13	13	1	9
1989	3	0	0	0	小　計	51	39	3	25
小　計	33	8	1	3	総合計	84	47	4	28

峰が登れることなどが人気を呼び、コムニズム（現イスモイル・ソモニ）、コルジェネフスカヤ、レーニンに毎年大勢の登山者が訪れた。そして八九年にはその形式が天山山脈でも取り入れられ、ボベーダ、ハン・テングリも解禁され人気を呼んでいる。

一方、旧ソ連崩壊後のタジキスタンでは、政治的不安のため、イスモイル・ソモニと改名されたコムニズムは登山できない状況にある。

旧ソ連の七千メートル峰五座すべてに登頂した者には「スノーレパード」と呼ぶ称号が与えられる。ちなみに日本人の該当者は、近藤和美、林雅樹、品川幸彦、田部井淳子の四人である。

五、一九九〇年代

［中高年時代、高所遠足の出現］

八〇年代半ば、ヨーロッパ勢が八千メートル峰登山の隊員を「公募」し始めた。ダウラギリ主峰、マナスル、アンナプルナ主峰と続いたその流れは、やがてカラコルムに波及した後、当然のごとく世界最高峰エヴェレストにきた。

そしてチョー・オユーが解禁されると、東洋の神秘（チベット&ラサ）への興味と二つの八千メートル峰（シシャパンマ）が一度に登れる経済的効果もあってチベットは公募登山隊の主流の地となった。

九〇年代に入ってネパール側のエヴェレストは、欧米のアルパイン・ガイドら営利会社が主催する「ガイド付き国際公募隊」によって占められ、オーバーユーズの状態が定着した。これらの公募隊に一定の費用を払って参加する登山者は、許可の取得はもちろんルート工作も、荷揚げも、キャンプの維持も、ガイドやH

ＡＰ任せにしてガイドの指示に従って登頂を目指すのである（私は、記録整理上これを高所遠足と規定している）。

ネパール政府は、九六年春のシーズンからエヴェレストの通常ルートであるサウス・コル経由の登山料を七万ドルと法外な金額に値上げした。このため、世界最高峰を舞台に自らの登山を展開しようとする登山隊は必然的に中国側に追いやられてしまい、結果的に中国側もオーバーユーズの状態となった。

八〇年代後半からヒマラヤの有名な峰の登山では大変残念な現象が定着している。それは「固定ロープを張って登るのは日本隊と韓国隊で山を汚している」と非難する欧米らの登山者たちが、他隊の張ったロープやテントを無断で使用し、ひどい例では食糧や酸素まで勝手に使っているのである。

このような背景の中で九三年冬にエヴェレスト南西壁が群馬岳連隊によって登られ、九一年の雪辱を果たした。九四年、山野井泰史がチョー・オユー南西壁を新ルートから単独アルパイン・スタイルで登った。同じく南西壁のスイス・ポーランド・ルートを山野井妙子と遠藤由加がアルパイン・スタイルで登った。山野井妙子は九一年マカルーを無酸素で登頂した。

八千メートル峰の新ルートは、九〇年、横浜山協隊がチョゴリ北西壁下部、九五年、ＪＡＣ隊がマカルー東稜下部、チョモランマ北東稜完登（日大）、九七年、ＪＡＣ東海隊がＫ２西壁上部を初登攀。

七千メートルの初登頂は、ナムチャ・バルワ（九二ＪＡＣ）、ヒムルン・ヒマール（九二北大）、クラウン（九三ＪＡＣ東海）、ピラミッド・ピーク（九三ＨＡＪ）、アク・タシ（九三広島山岳会）、チリン（九四岐阜大）、ギャジ・カン（九四信大）、トゥインズ（九四日本）、マナＮＷ（九五山形）、ラトナ・チュリ（九六信大）、ウルタルⅡ（九六ＪＡＣ東海）、リスム（九七労山）、リャンカン・カンリ（九九日本）などがある。その他ではカンチェンジュンガ主峰のインド側（九一ＨＡＪ）、ミニヤ・コンカ（九七札幌山岳会）登頂。

七千メートル峰の新ルートとしては、トリヴォール（九一早大）、チョモ・レンゾ（九三立大）、ナムナニ（九九ＨＡＪ）などがある。

日本の高齢化社会の到来は、当然のことながら登山の世界をも席巻している。石川富康や近藤和美は、五十歳台になって八千メートル峰登山を開始し、既にそれぞれ六座をものにしているし、六十歳台で八千、七十歳台で六千メートル峰の高所遠足も実現している。これからは当然高所登山の世界にも進出してくるだろう。（五ページの表参照）

■終わりに

四十九年間で七千メートル以上の峰の登頂者は、複数峰登頂者三百十人、一度だけ八千メートル峰に登頂した岳人百六十四人、同じく一度だけ七千メートル峰に登頂した岳人は八百二十七人、合計千三百一人である。もちろん、ここでは触れなかったが六千メートル峰でもアルピニズムの観点に立った優れた登攀が幾つもある。それらを抜きにして、七千、八千メートル峰での活躍はできなかったに違いない。登山も人の行為である限り突如として素晴らしい登攀が出現するわけではない。連綿として続いた技術の継承や装備の改良など、人の繋がりがそこには介在している。

登頂の陰には遭難がある。別表にあるとおり死亡率は二・二％、入山者の四十五人に一人が死亡している。これは現在では戦争以外にはない数字である。しかも、一九六八年以来三十三年間連続して死亡事故が発生している。岳界あげてこの記録はストップしなければならない。当然のことながら困難を目指さなければ事故も減る。未知や困難を求めて事故を防止することが本旨である。植村直己、加藤保男、吉野寛、禿博信、斎藤安平、山田昇、長谷川恒男、小西政継、広島三朗、須藤建志など経験豊な岳人が山で遭難している。二、三度程度の高峰登山の経験で「山」を知ったつもりにならないことが大切だと思う。そして何よりも大切なことは、「自己責任」のもとに登山を進展してゆかなければならない、ということである。

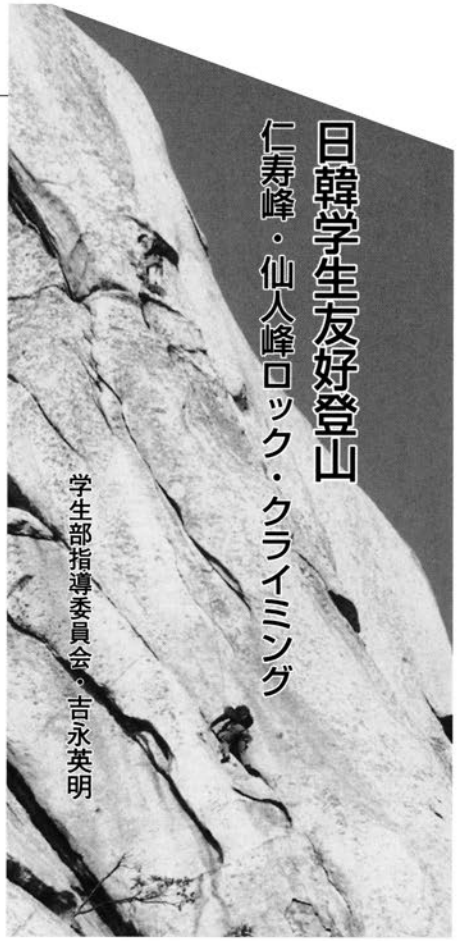
現在ほどヒマラヤ登山にとって安定している時期はなかった。ヒマラヤ諸国が登山申請などの面で規制緩和を行い、登山者はかなり自由に入山できるようになったし、前述したような公募隊にインターネットを利用して直接参加する人も多くなる。その結果として登山情報の蓄積ができない状態が出現している。現在登山四団体でこの事態を打開するための方法を模索しようと合意したが、現実には人材と費用の面で進展していない。

私たちを夢中にさせ、充実した日々を与えてくれた「登山の、ヒマラヤの」素晴らしい世界を、登った人のことも、志半ばでヒマラヤに眠った人のことも含めて、「文化」として後世に伝えてゆきたいものだと思う。文中、敬称は省略した。

日韓学生友好登山

仁寿峰・仙人峰ロック・クライミング

学生部指導委員会・吉永英明



学生部指導委員会（担当常務理事・宮崎紘一）と学生部（委員長・新津正浩）では、昨年の日中学生友好登山（四川省・雪宝頂）に続いて、本年も十月十六日から八日間、韓国学生山岳連盟傘下の学生たちとの交流登山を行った。

韓国には、日本山岳会に相応する韓国山岳会（CAC）、日本山岳協会に相応する大韓山岳連盟（KAF）のほか韓国学生山岳連盟（KSAF）があり、大学山岳部の育成と、OBの交流を主眼とした活動を行っている。全国約二百校ある大学のうち六十四校が加盟しており、ヒマラヤ遠征も活発に行っている。

韓国はロック・クライミングのエリアとして知られており、今回も仁寿峰、仙人峰のビッグウォールでのロック・クライミング交流となった。

十月十六日　成田―ソウル　金浦空港で、李碩浩主席副会長らの出迎えを受け、牛耳洞の韓国登山文化院へ。夜十一時を過ぎていたにもかかわらず、金鐘浩連盟会長、李圭泰諮問委員ら多数が待っていてくれた。韓国登山文化院は孫慶錫本会名誉会員によって設立され、登山関係の蔵書が展示されていた。

十月十七～十九日　韓国学生とパーティーを組み、仁寿峰東面、ウジョンA・Bトンヤンキル、アンドゥなどの各ルート登攀。

十月二十～二十一日　仙人峰、パクナ、ピョゴン各ルート登攀。

十月二十二日　韓国学生山岳連盟会員宅にホームステイし、韓国学生たちの案内で、高麗大学、国会議事堂ほかを見学。

十月二十三日　ソウル―成田

初日の仁寿峰では、日本側は初めて見る大スラブに口をあけてただ見詰めるのみであったが、韓国学生たちの好リードで次第に慣れ、グレードを上げていった。昨年の中国学生たちが持つ高所登山の経験と、韓国学生が持つビッグウォールでの経験を垣間見て、大いに刺激を受けた。

また、二日目はJAC学生部主催の夕食パーティー、三日目には日韓学生懇親会、五日目には高麗大学山岳部とのテント合宿を行い、学生同士の交流を深めることもできた。大学山岳部中心の組織のある韓国の学生たちが少々うらやましく思えた八日間であった。

日本山岳会学生部メンバー

吉永　英明（学生部指導委員）
新津　正浩（学生部委員長・横浜国立大学山岳部四年）
井ノ口正明（法政大学山岳部四年）
石川　重樹（日本大学山岳部三年）
平出　和也（東海大学山岳部二年）

韓国学生山岳連盟メンバー

金　鐘浩（連盟会長）
李　圭泰（諮問委員）
李　碩浩（連盟主席副会長）
鄭　菊香（連盟理事）
劉　昌皓（連盟在学生会長・明知大学）
宋　基寶（連盟在学生副会長・建国大学）
尹　汝雲（高麗大学）
泰　永卓（仁荷大学）
柳　顯守（仁荷大学）
李　卿纂（慶熙医科大学）

季刊 山の本 No.34［冬号］
●1400円（税込）
発売中！

特集＝富士山を見る山歩き
小特集＝画廊「ある日の山」
短期連載＝天幕の話［第2回］
紀行＝菅峰、十二ヶ岳、鶴島御前山、釈迦ヶ岳、千枚岳、他
随想＝幻の名作を再び、ある遭難
コラム＝私を変えた一冊、光る栗駒山
［筆者］工藤隆雄、平野恵理子、池内 紀、横山厚夫、新妻喜永、他

山へ―原始の香り求めて
大内尚樹＝著　●1680円（税込）1月中旬発売
道無く、情報無く、規制も無い原始の香る山。そこには人間がより人間らしく生きるために不可欠な自由で、美しくも厳しい輝きが満ちている。時に荒ぶる自然と渡り合うには〈自己責任による自己決定〉の歓びがある。それこそが登山の精髄である。

▩本の一部が読める出版案内 http://www.kt.rim.or.jp/~hakusan
白山書房　〒153-0041東京都目黒区駒場4-7-8
TEL:03-3485-1309　FAX:03-3466-3964

海外の山

キルギスからの脱出

江本嘉伸

キルギス・カザフ国境にそびえるポベーダ峰（2000年8月江本撮影）

アメリカの男女四人のクライマーが、キルギスでの六週間のクライミングの肩ならしとしてカラ・スウ谷の「黄色い壁（イエロー・ウォール）」に取付いたのは、八月十一日だった。翌朝、取り付きから三三〇メートルほどの岩場が銃撃された。若者たちは猟師？と思った。しかし、二発目、三発目と弾丸が打ちこまれてから事態を理解した。基部にいて、自動小銃を構えて下りて来い、と叫んでいる数人の男たちは、ウズベキスタン武装ゲリラだった。

「Climbing」誌十二月十五日号にクライミング界に精通しているライター、ピート・タケダの「キルギスタンからの脱出」というレポートが掲載されている。クライミングという平和な行為が、突如ほんものの戦いに巻き込まれたらどうなるか、という、さながら映画でも見ているような驚くべきドキュメントだ（なお、国名は正しくは「キルギス」。いまでもキルギスタンという人は非常に多いが、九三年に改名されている）。この出来事、二〇世紀末の世界を象徴しているとも思われるので紹介しておきたい。

四人のクライマーのうち二十二歳のカルドウェルは、今回も同行した恋人のロッドン（二十歳）とともに一ヵ月前、エルキャピタンのラーキング・フェアという二十二ピッチのルートをフリーで初登攀したばかりだった。同じ二十二歳のジェイソン・スミスもヨセミテやバフィン島で数々のクライミングを実践している。二十五歳と最年長のジョン・ディッキーは、クライマー兼フリーランスカメラマンとしてやってきていた。

壁を下りた四人は、そのままベースキャンプまで歩かされる。そこには他のゲリラたちと、捕虜となったキルギス軍の兵士ひとりがいた。仲間の兵は殺され、彼は山の案内役として残されたのだ。

日本のように四囲すべて海洋、という国家と違い、さまざまな民族が隣り合って住む中央アジアには国境が入りくんでいるところが多い。キルギスといっても南東に位置するカラ・スウ谷は、タジキスタン、ウズベキスタンと国境を接していて、ゲリラ活動の拠点にもなっている。

話は通じなかったが、ゲリラたちの様子から、アメリカ人である四人が絶好の人質とみられていることを知る。捕まっているゲリラ仲間との引き換えに、役立つとみなされたのだろう。

ザックを背負ったまま谷を数キロ歩かされたところで、再び銃撃勃発。今度はキルギス軍側がゲリラたちを発見したのだ。ゲリラは捕虜の兵を歩かせ即座に処刑し、戦闘はほんものになった。

キルギス兵も撃たれた。「頭に二度も弾を撃ちこんだんだ」と、スミスは言う。

「（目立たぬよう）遺体の足もとにすわりこんで、必要なら安全のためにいつでも遺体を頭からかぶるつもりだったよ」戦闘は六時間続いた。

その後の四日間、昼は隠れて、夜になると歩くという試練を強いられた。食事も水も持っていなかったか、戦闘でなくしてしまっていた。ゲリラたちも何もないのに、彼らは実にタフだった。

クライマーたちにとって都合のいいことは、ゲリラたちが英語をほとんど解さなかったため、自分たち同志で話ができたことだった。彼らの〝お守り役〟としていつもそばにいたはたちのゲリラ、ユスフを前にして、こんな会話が交わされた。

「なあ、いま飛びかかって頭を叩き割るのはどうだい？」

どんなふうに歩いたのか、いつのまにか元のイエロー・ウォールのベース近くまで戻っていた。

人質になって五日目の深夜、ゲリラの指揮官が無線機のバッテリーの交換のためユセフ一人を残し、稜線の上で会おう、と先行した時がチャンスだった。四人は稜線上にたどり着いたあと、機を伺ってユセフを谷に突き落とした。一五、六キロ離れたキルギス軍のベースまで必死の脱出が始まった。

「ウィー・アー・アメリカン！」銃撃してくる兵士たちに向かって四人は懸命に叫び、奇跡の生還劇は無事終了した。

キルギス南部は九九年にも日本の鉱山技師たち四人が拉致された事件がある。北部の天山山脈付近は危険はない、とされるが、ポベーダ峰を目ざしていた日本の女性パーティーもアタックキャンプまで達したところで、撤退勧告で下山した。山登りの隣りの戦斗。勇気ある四人ではあったが、やはり行くべきではなかったのだろう。

報告

REPORT 12月

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

総務委員会

第三十一回「新入会員オリエンテーション」開催

九月三十日午後二時より、平成十一年度下期入会者（対象会員番号＝一三二〇三～一三三一四までの百一名）のオリエンテーションが、本会ルーム会議室で開催された。大塚会長、河西理事列席のもと、名古屋（東海）および富山（富山）の各支部からの参加者三名を含めて二十二名が出席した。

総務担当高原理事の開会の挨拶に始まり、恒例のビデオによる説明など、会組織と活動全般にわたる紹介、藤田委員による山岳保険、総務顧問の神崎監事の歓迎スピーチを交えた上高地山研の案内などが行われた。

記念撮影をはさんで、大塚会長が「新入会員の皆さまへ」と題した講演を行った。アルバータ峰登頂にまつわるエピソードから始まり、アメリカ山岳会の現況紹介を踏まえ、海外の山岳会との活発な交流を図りたいとする姿勢や、新入会員に対して知的チャレンジのみならず各自の体力年齢を把握しつつもアクティブ（行動的）な活動への期待を述べた。

続いて新入会員の自己紹介が行われた。今回の特徴は出席者の三分の一が海外トレッキングの経験者ということである。同好会からの参加呼びかけのあと、恒例の懇親会となり、それぞれが持ち寄った「自慢の酒・ワイン」を賞味しながら歓談のひとときを過ごした。少人数ながらもなごやかな輪が広がり、六時半過ぎ、盛況裡に幕を閉じた。（中川幸平）

オリエンテーション参加の新入会員22名

自然保護委員会

がんばってます「北高尾の森」づくり

ＪＲ高尾駅から小仏峠に通じるバス道を約四キロ、日影沢の登山口を過ぎ、中央道のガードをくぐるとすぐ右手が小下沢林道の入口である。キャンプ場から沢を渡って左手に景信山への登山道が通じている。

ここから先関場峠に至る小下沢右岸の沢筋から稜線までの斜面に広がるスギとヒノキの森がわれわれの山仕事のフィールドである。沢沿いにはカエデなど広葉樹が残され、小滝も望見されて、ここが年間二百五十万人の都民が訪れる高尾の一角とはにわかに信じがたい静かな渓谷美が広がっている。

絶好の山仕事日和に恵まれた十月二十八日、河西理事以下三十数名のボランティアが集まり、第二回の体

新ハイキング選書

◀第4巻▶ 改定第2版 **一等三角点のすべて**
多摩雪雄 編　B6判・350頁・定価1995円(税込)
都道府県別に一等三角点を地図上に明示。一等三角点の詳細な解説、一等三角点研究の決定版。

◀第9巻▶ 第3刷 **一等三角点の名山100**
B6判・336頁・定価1632円(税込)
100山すべてコース図と写真入りで実用性が高い。

◀第18巻▶ 改定第2版 **一等三角点の名山と秘境**
A5判・340頁・定価1837円(税込)
全国一等三角点の地方別の配置図と全国の一等三角点の総覧が付いている。一等の山100座を紹介。地図が大きく見易い。

◀第20巻▶ **一等三角点の山々**
A5判・310頁・定価1680円(税込)
一等三角点の山シリーズ。280山の総索引と高度順一等三角点100座が付いている。80座を紹介。

第9巻、第18巻、第20巻のガイドの山は重複しません。

新ハイキングの見本誌はハガキで申し込めば無料で送付します。
新ハイキング社　〒114-0023 東京都北区滝野川7-6-13 電話・FAX 03(3915)8110

北高尾の森の体験林業に集まった会員たち

験林業が行われた。当日の参加者は会員以外に、一般の方、家族連れ、女子大生などバラエティに富んだ構成になった。経験者も未経験者も、老いも若きもヘルメットをかぶればもう一人前の山仕事師風である。

高尾森林センターの田端署長、岩下さんのご指導のもと、前回に引き続いてヒノキの除伐作業を行った。フィトンチッドに富んだ森で、一日いい汗を流すのは本当に爽快である。昼食を挟んで約三時間の実働であったが、楽しい一日が過ぎ、最後はキャンプ場でトン汁を作り、乾杯で締めくくった。

二回にわたる体験林業を終えてこれからがいよいよ本番である。「森づくり」という息の長いプロジェクトを成功させるために、会員各位の大いなるバックアップと、一般の方たちを含めてボランティア精神に富んだ多くの皆さんの参加をお願いする次第です。

（山川陽一）

資料委員会

第四回山岳博物館等連絡会議

十月二十一日、東京都北区飛鳥山博物館において、表記の会議を開催しました。十二博物館（松本市アルプス山岳館、植村直己冒険館、㈶植村記念財団、市立大町山岳博物館、河口湖美術館、田淵行男記念館、秩父宮記念スポーツ博物館、東京都写真美術館、東京都北区飛鳥山博物館、富山県立山博物館、伯耆国山岳美術館、大迫町立山岳博物館）より十三名の館長、学芸員、日本山岳会より小倉副会長、鰺坂理事以下八名が出席。資料のデータベース化、保存、特にフィルム、ビデオテープの劣化についてなど、貴重な指導、意見をいただきました。

（鰺坂青青）

12の山岳博物館の館長らが集い連絡会議を開催

フィルムビデオ委員会

日本最初期の山岳映像「雪の薬師、槍越え」を上映

「映像の世紀」といわれた二十世紀、山の映画もその例外ではない。

十一月一日、フィルムビデオ委員会では久しぶりに16ミリフィルムによる映画会を開いた。当日の夜雨にもかかわらず四十名を超える会員が集まり、スクリーンに映ったモノクロの映像に見入った。大正十二年から積雪期二シーズンにわたって撮られた山の記録映画である。タイトルは「雪の薬師、槍越え」（四十八分）。

この映画は、二〇〇〇年四月に完成（未編集フィルムをまとめて作品化）し、五月、東京を皮切りに各地で上映、絶賛を博した。わが国近代登山史上にとどまらず、民俗学的にも貴重な映像資料としても注目を集めている。

この記録映画「雪の薬師、槍越え」を撮ったのは名古屋の素封家・伊藤孝一。大正十二年二月、對山館の百瀬慎太郎と燕小屋の赤沼千壽らの協力を得て、まず雪の立山から針ノ木峠を越えて大町へ。35ミリの手回しカメラが伊藤隊のトレースを克明に追う。雪中、集団による針ノ木峠越えは天正十二年冬、富山城主・佐々成政が徳川家康に救援を求めた雪の峠越え以来の快挙でもあった。

針ノ木峠越えを果たした伊藤隊は、翌十三年の冬、周到な準備を終えて有峰を基地に三度にわたる雪中山行を計画、上ノ岳冬期初登頂、薬師岳厳冬期初登頂に成功した。さらに黒部領域を踏破して槍ヶ岳に登頂する。頂に立ったカメラは、手回しによる卓抜した技術によって三六〇度のパーンニング。雪の北アルプスの全容が初めてフィルムに記録された。

エンド・タイトルに、この山行と撮影に協力した芦峅寺のガイドらの名がロールアップされ、いかに大掛かりであったか、彼らの行動力に感動させられる。

撮った膨大なフィルムは、戦後しばらく幻となっていたが、発見の経緯などは会報「山」六六四、六六五号に掲載されたので参照されたい。

伊藤の撮ったフィルムは、これまでテレビなどで断片的に紹介されたが、今回の上映作品は、「立山、針ノ木越え」をプロローグに、「雪の薬師、槍越え」を本編として構成。これに音楽と解説をつけて作品化し、伊藤隊の全貌を明らかにしたもの。作品

化は、伊藤の遺した山行日誌などを手がかりに富山県「立山博物館」と伊藤の四女都留子さんの協力により、羽田栄治の構成によって完成した。

映画の後、フィルムの編集に当たった羽田栄治フィルムビデオ委員長と近藤隆治委員（東京福原フィルム社長）のトークに入った。伊藤はなぜ、このような大きなスケールの撮影山行を思い立ったのか、また撮影時のエピソードなど、かつて映像制作の現場にいた両委員の尽きない話題から、伊藤の足跡に想いを馳せた。羽田委員長は最後に「映像は歴史の証人であり、また人類の財産でもある」と結んだ。

（山口俊輔）

第二十一回東北自然保護のつどい　鯵ヶ沢大会・シンポジウム「白神と東北ブナ林の未来」

十月十四、十五日と白神の鯵ヶ沢町で表記の大会が開かれ、日本山岳会からの報告を求められた。ちょうど当日は自然保護全国大会と日程が重なり、自然保護委員会の委員は全員そちらのため、現役でない私が、青森支部を差し置いて日本山岳会を代表する形の現地報告を行った。

話したことは「現地の歴史と事情から離れた位置にいる私たちから見て、青秋林道を止めたあとの姿勢を、協力復元に変えてもいいのではないか。復元活動は破壊防止への最大のメッセージではないかと思っている。

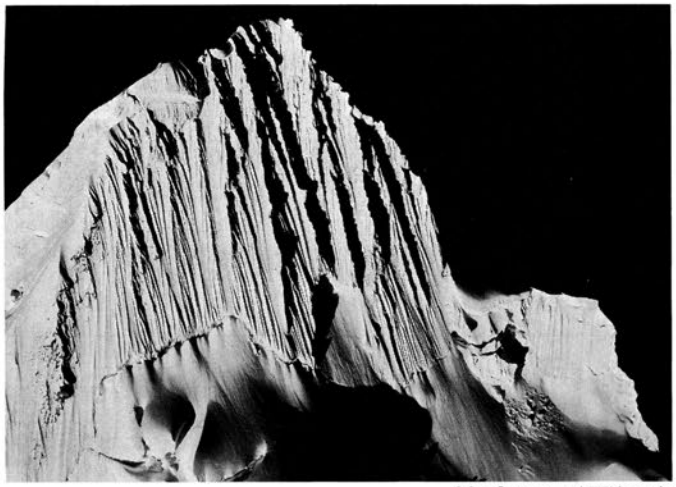
九五年頃からの青森営林局との折衝で九八年十一月に福島課長より許可の手紙が来た。現地の人だと青秋林道反対の活動の余波でか、どうしても対決姿勢になりやすい。その点離れた人間の話だから聞いてもらえたと思っている。もらったのは鯵ヶ沢営林署管内〈61へ＝林小班〉と〈61へ＝林小班〉の育林の許可であり、私たちの世界遺産に接する場所という希望が一〇〇パーセント入れられたものであった。既に現地作業を三回行った。これからも青森支部が全国の日本山岳会会員に呼びかけて続ける」

山を育てる仕事は楽しい。私も白神で採取した種を自宅で発芽させて今育てている。百周年の時には白神に返すつもりでいる。今年はブナの豊作の年、昨日奥赤石に入って採取した種があるから、皆さんも持ち帰って育てて、自分の育てた苗を白神に戻してください、と大会の中でも二十一世紀に向けて「自然の保護から自然の復元に」が強調された。

（会員の方でブナを植えたい方には種を差し上げますのでお知らせください。Fax〇四五-八三三-八五〇五）

（大森弘一郎）

これが白川芸術の最高峰。世紀を超える偉業をここに集大成。



（I）より「アルパマーヨ南西壁（ペルー）」

ヒラリー卿をはじめ世界の偉大な登山家、著名山岳関係者が選出した荘厳で秀麗な名峰のすべてを白川義員が4年をかけて撮影。撮影エリア20数ヵ国、50地域以上。生命を賭して神々の峰と対峙した魂の記録が圧倒的な感動を呼びます。新世紀の幕開けを飾るにふさわしい気高き峰々の美の記録です。

2000年12月下旬発売予定
（I）ネパール・南北アメリカ

2001年春発売予定
（II）パキスタン・ヨーロッパアルプスほか

2001年秋発売予定
（III）インド・中国ほか

定価（各）：本体38,000円＋税
A3判／総176ページ（カラー136ページ）／ケース入り
全3巻／小学館

白川義員作品集
世界百名山
THE WORLD'S HUNDRED GREATEST MOUNTAINS

白川義員 写真展「世界百名山」
東京・新宿タカシマヤ10階＝平成12年12月31日（日）→平成13年1月9日（火）
※1月1日（月・祝）・2日（火）は休業日　お問い合わせ先 TEL03(5361)1111
主催：NHKプロモーション　協力：コニカ株式会社

■内容見本進呈。書名をご記入のうえ、下記の宛先までお願いします。
〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
小学館宣伝営業部「世界百名山」内容見本 係
小学館「愛読者注文センター」●TEL03-3230-5739　●FAX03-3230-0094
インターネット小学館オンラインショップ http://www.shogakukan.co.jp

JAC 支部だより

全国各地の支部から，独自の活動状況をリポートします。

山陰支部

鳥取県西部地震の報告とお礼

山陰支部長　高田允克

十月六日午後一時半ごろ、当山陰地方を中心に震度6強の大地震が襲い、「鳥取県西部地震」と名づけられました。本会山陰支部所属四十七名の自宅はすべて震度4以上の区域内にあり、中でも震源の活断層に近かった西伯郡会見町、日野郡日野町、溝口町、米子市の一部など、在住の会員十数名の自宅はかなりの被害を受けました。しかし、物的損害のみに留まり、会員に一人の死傷者も出なかったのは不幸中の幸いでした。この間、全国の岳友の皆さまには多大なご心配をおかけし、またご丁重なお見舞いをいただきました。ここに支部会員一同を代表して全員の無事をご報告し、厚くお礼を申し上げます。この試練に屈することなく、今後より一層当支部の活性化に努力したいと思います。

なお地元の名峰・大山ですが、もともと崩壊の激しい山であるところへ、今回の地震でさらに登山道の一部が崩壊した個所もあります。今のところ一般ルートからの頂上往復は可能ですが、その他のルートについては当支部でも調査が行き届いていませんので、どう変わっているかわからず、来山の際にはくれぐれも慎重を期されるようお勧めします。

「友の会」山行立山三山と剱岳

「友の会」の元気な女性たちと剱岳に登る

山陰支部には友の会組織が昭和五十九年に誕生し、鳥取県西部を中心に山岳を愛好する地域住民との共生を図っている。今年は九月三十、十月一日に、紅葉の始まりと初雪の残る立山と剱岳の登山を行った。参加者二十五名のうち会員は八名。平均年齢は五十八歳、剱岳の悪場をガイドするのには適切な人数であった。

二十九日の夜、大型観光バスで米子を発ち、三十日八時に室堂に着いた。当初は立山班と剱班に分ける予定であったが、天候は悪化の兆し。その日のうちに全員で立山三山をめぐって剱山荘に入ることにした。

一ノ越経由で雄山へ。ここまでは登山者も多く、道の雪は踏み消されていた。富士を含め明瞭に見えていた山々に暗雲が垂れ下がってくる。全員がそろうと、参拝もそこそこに先を急ぐ。登山者も減り、日陰道の残雪は二〇センチ程度となる。今回の最高点大汝峠を通過し、富士の折立あたりから雨となるが視界はきく。内蔵助の小屋を見て、かつてこの時期に起きた中高年グループの遭難死を思い出した。剱山荘に十五時着。夜半には前線の通過で暴風雨となる。

一日、雨は収まったが、ガスで視界はゼロに近い。しかし遠来の客を歓迎してくれたのか、前剱に近づくころにはガスの切れ間に剱岳が見え始める。登山者は少なく、懸念された悪場の残雪、岩場の濡れによるスリップも、昨夜の暴風雨と気温の上昇で解消し、スムーズに剱岳山頂にガイドすることができた。下りかけたころから再びガスに包まれるが、有料道路のゲート閉鎖の時間に急かされ、一気に室堂まで下った。十六時着。

会員以上に元気な中高年の女性たちに驚いた。帰りの車中では、次はどこの山へと話が弾む。米子着五時。さあ仕事、と元気よく散っていった。

（清瀬祐司）

宮崎支部

北アルプスの定例山行

■三十三人が参加

宮崎支部は昭和六十年七月、全国二十番目の支部として産声を上げ、十六年目を迎えた。昨年九月、支部結成十五周年を記念して北アルプス登山を計画したが、出発直前に台風や集中豪雨による上高地・釜トンネル付近の崩壊によって、中止を決定する苦渋の選択だった。

「今年こそは」の念願は、月例登山や月例研究会での熱気が強烈であった。まず先発隊としての第一班・十三人、七月十九～二十三日。第二班・二十人は九月二十二～二十六日の四

泊五日とし、同一コースを踏破することとした。第一班は二組、第二班は三組に編成して、リーダー、サブリーダー、記録、写真、食糧、装備、救護係を分担し、事前のトレーニング山行では三点確保、ザイルワーク、バランスなどの反復訓練で知識、技能のアップを図った。

コースは、第一日・宮崎空港から羽田空港、新宿、松本経由で山研泊。第二日は山研、明神、徳沢、横尾経由で涸沢ヒュッテ泊。第三日・涸沢ヒュッテ、北穂高岳、涸沢岳経由で穂高岳山荘泊。第四日・穂高岳山荘、奥穂高岳、前穂高岳、岳沢ヒュッテ、山研、上高地経由、松本泊。第五日・松本、新宿、羽田空港経由、宮崎空港であった。

念願だった北アルプス登山の宮崎支部員

■高山病スコア実施

各班とも、一日半は雨、霧に見舞われたが、朝暉夕陰の美やモルゲンロートの自然現象に感動し、全員無事全コースを踏破することができた。この成果は、今後の山行に大いに発揮されるであろう。

第二班では、二、三千メートル級の登山においての高山対策として、「高山病スコア（AMS）」で頭痛、消化器症状、疲労脱力、めまい・ふらつき、睡眠障害、息切れ、せき、動悸（安静時）などの調査を行ったが、今後、医師の意見を聴取して山行の参考としたい。

河童橋から返り見る前穂高を後に、感動をくれた三日間の行動は、これからの山行の大きな財産となるであろうと、感謝しつつ上高地を後にした。

（井野元　繁）

青森支部

クマゲラの森のブナ再生事業

九月九日から十一日、日本山岳会百周年記念事業の一つである白神山地体験林業（ブナ林再生事業）に参加した。これまでの作業としては、除伐（ウツギ、ツルアジサイ、ヤマブドウなど）や下刈り（チシマザサなど）を行って林床を整備するとともにブナを植えてきた。

クマゲラの森でブナの植林を行う

今回は、除伐や下刈りの拡大のほかに、今年の六月に移植したブナの幼樹二十四本の活着状況の調査をした。梅雨期とはいえ好天続きの中での植樹だったので、しっかり根づいているかどうか心配したが、見事二十二本が元気に育っていた。それを確認できたときにはホッとするとともに、樹高二四、五センチの幼樹が大木に見えた。そして、五十年から百年後には一面のブナの森となる第一歩だと実感した。

今後は、自然に根づいているブナを生かしながら、現地で採取したブナの種子を協力機関に育苗してもらい、移植することも計画している。また、「私の木」ということで、成長を継続調査する樹木を選定し、同じ木の樹幹直径と樹高を特定の会員が継続調査することも予定されている。

私たち会員は、植林事業に関しては素人集団だが、試行錯誤を繰り返しながら、長期的な展望に立って自然の再生に寄与していきたいと思う。

毎回の作業に参加しての楽しみの第一は、夜の懇親会である。現地調達した山菜を肴に、持ち寄った地酒を酌み交わしながらのひとときは最高。また、生息地の中にテント場があるため、クマゲラが時々姿をみせてくれる。クマゲラに会えるブナ再生事業にあなたも参加してみませんか。

（柿本　孝徳）

北アルプス白馬連峰
白馬五竜スキー場直下
スキーツアー、雪上訓練、クロスカントリー
スノーシューによるスノートレッキングに
ご利用ください。
11月より滑走可能
リフト割引券あり
和牛料理の宿
ひまわり
長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL（0261）75－2292㈹
FAX（0261）75－3284

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度でお願いします）

イラスト・宇都木慎一

エベレスト登頂とタイムカプセル

平林克敏

右上はタイムカプセル、その中に入れたエベレスト頂上の石（左上）と30年前の平林氏

三十年前、「日本山岳会エベレスト登山隊」が初めて登頂に成功した同じ年、大阪で万国博覧会が開催されていた。

この万博の開催の記念事業として、現代の人類文化の結晶の記録を文化遺産として遠い後世へ伝えるため、五千年のタイムカプセルを埋設した。この壮大なプロジェクトを「タイムカプセルEXPO'70」と称し、当時大きな話題となった。

この中に日本山岳会がエベレストから持ち帰った頂上の石と登頂のカラー写真が納められている。

収納品アイデアは国内一般公募約十三万点と世界各国の人々の協力によって集められたものの中から、選定委員会により選ばれた、自然科学、社会、芸術の三分野に分けられ、科学技術の成果を示す「自然科学分野」七四二点、「社会分野」では、一九七〇年当時の風俗や社会を物語る六八六点、「芸術分野」では、美術や音楽などの水準を示す五九二点が、その他七八点と共に収納されている。

この中には、「現代風ロゼッタ石」とも言われる、日本語を含む国連常用語でステンレス板に食刻。「私たちは五千年後の人間の繁栄を信じ、二十世紀の記録としてこのカプセルを残します」とする文面や、絶滅しつつある動物および鳥などの鳴き声のテープと生態フィルムなども含まれている。

収納物は種類によって、三十個のミニカプセルに入れ、内径一メートルの本体カプセルに納められている。エベレストの山頂の石は、社会、文化の中のその他の項に、登頂の写真は、興味レジャーの項に納められ、下記の番地に収納されている。

収納品の選定は、万博開催の約四年前から進められ、万博開催の年には内容がほぼ確定していたが、日本人による、エベレスト登頂の快挙を知り、急遽飛び入りで追加されたものである。

分　類
社会・文化のその他……一一番Ｂｏｘに石
興味レジャー……二七番Ｂｏｘに写真

整理No.
石……Ｓ－一五－三－一
写真…Ｓ－二三－二－三

この石は、松浦、植村両隊員が頂上から持ち帰ったものを当時の隊員であった住吉仙也、中島道郎、松浦輝夫、神山義明と私の五隊員と、私と共に登頂したサーダーのチョタレーとシェルパのピンジューの七名が、六月二十八日にこのプロジェクトの主催者である松下館を訪問し届けたものである。

また、写真は一九七〇年五月二十六日に、毎日新聞に全紙カラーで掲載された、五月十二日に頂上に立つ私の姿をチョタレーが撮ったものを、カラープリントとマイクロフィルムにして納められている。

ニッケルクロムを基調とした特殊ステンレス鋼のこのタイムカプセルは、保存科学の最高技術を駆使し、四年をかけて製作されたものが万博で公開された。タイムカプセルの話題は当然のこととして、エベレスト山頂の石も当時大変な人気で、七百六十万人の人が見学に訪れたほどで

あった。

私たちも万博協会の招きで、講演のため、来館中のヒラリー卿や桑原武夫先生と共にネパール館や松下館、日本館を見学させていただいたが、五千年のタイムカプセルは常に会場で話題となっていた。

翌一九七一年、一月二十日に一号機（五千年後開封）、同二十八日に二号機、（百年毎に開封）が、大阪城公園の地下、十五メートルに埋葬された。

カプセルは、このプロジェクトの主催者、毎日新聞と松下電器産業から国に移管され、文部省の所管となった。

二号機の第一回開封は、収納品点検作業のため、三十年後の西暦二千年に行われることになっていたので、今年三月十五日、地下から取り出し、予定通り点検作業が行われた。去る十一月二十三日、次の開封時、二千百年に向け、再び埋葬された。

この折に、百年毎に点検される二号機には、各百年後のメッセージが添えられ、次の世紀への夢と提言を綴った作文・論文集などを未来の人類へ送り継いでいくことになっている。

日本山岳会の寄贈したエベレスト頂上の石と、写真が五千年後の未来の人に何を語りかけるのか、また、五千年後の登山という行為そのものがどのような価値を持ち続けるのか、大変興味深いところである。

だいいち、五千年という気の遠くなるような未来をどのようにして計るか、その時計の基軸自身が問題となろう。このため、プルトニウム239から出る、α（アルファ）粒子が、ヘリウム・ガスになる点を利用して、発生ガスの体積で時の刻みを表示するなど、画期的な方法が取られているので、五千年後の人類が、その時点から五千年前の今日を正確に振り返ることは当然可能だろうと思われるが、プルトニウムの時の刻みは正確であっても、人類の存続の可能性は必ずしも高いとは言えないだろう。

現在のわれわれの文明の歴史がほぼ、五千年前を振り返ることができるように、五千年後の六九七〇年から現在を見つめることも、恐らく可能であると信じたい。

このことは一に、地球上における自然の循環系の中から、人類が逸脱しないことが生存の原則となるだろうけれども、人類は地球環境に大きく介在することによりこの五千年の可能性すら失おうとしている。

タイムカプセルを取り出す人類の生存を信じ、石と写真は、五千年の時を過ごすことになる。

ひとくちインターネット・2
インターネットの長所

インターネットの長所のひとつに、いながらに必要な情報をいつでも入手できるということがある。ニュースや天気予報、求人、住宅、時刻表、地図、花の知識、料理……（ガイドブックにはありとあらゆる情報がある、と書いてあるが、期待はずれも多い）。JACの山研やルームの予約状況、山行やイベントの参加状況、図書の内容なども確認できるよう期待にこたえたい（いまはできません）。N

シャモニの正しい発音とラスキンについて

近藤　等

会報九月号（六六四）にシャモニとラスキンのことが書かれてありましたので、正確な情報提供のため一筆いたします。

まず会報にシャモニーと書かれていましたし、多くの人はシャモニで終わるべきところをシャモニーとのばして書きます。しかしChamonixの最後のxはフランス語では、とどめのxであり、ニーとのばして発音されません。またついでに申しますと、シャモニックスと発音するのが正しいというようなことを『グリンデルヴァルトの山案内人』の日本訳の長いあとがきの中で井手賁夫教授は書かれておられますが、パリやマルセイユ辺りではこういう発音をする人がいますが、グルノーブルを中心としてローヌ・アルプス地方の人人や、リオン、とくにシャモニの住民は誰もシャモニックスとは発音しません。なおシャモニのつづりは（発音と異なることになりますが）十八世紀以後、十三通りのものがありました。

Chamounix,Chamouny,Chamouni,Chammomis,Chamunix,Chamony,Chamogny,Chamoigny,Chamonis,Chamounis,Chammuny,Chamunis

地の果ての大自然パタゴニア 15日間

発着地　東京発着・大阪発東京着

【ツアーのポイント】
チリ側のパイネ山群とアルゼンチン側のフィッツロイ山群の両方を訪れます。2大山群のハイキングに加えて、雄大なモレノ氷河も訪れる、パタゴニアの山旅の決定版。テント泊なし、すべて宿舎泊。

《旅行期間》
●2/1（木）～2/15（木）
●2/22（木）～3/8（木）
●3/7（水）～3/21（水）

¥728,000

運輸大臣登録一般旅行業490号／日本旅行業協会正会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 港区西新橋1-12-1（西新橋1森ビル）TEL.03-3503-1911
大阪☎06（6444）3033　名古屋☎052（581）3211　福岡☎092（715）1557

これらのスペルは十八世紀から十九世紀にかけての彩色銅版画に数多く使用されています。シャモニを訪れた画家たちが、作品の下に場所の説明としてスペルを間違って書いているうちにこんな多数になったのだと思われます。そして現在定着しているChamonixで、一九二二年からは、この後にMont - Blancがつき、正式にはChamonix Mont - Blancとなりました。

山梨県の富士吉田市は、上吉田町、下吉田町、明見（あすみ）町の三カ所が合体し、ちょうど五十年前に市制が施かれるようになり、前に『富士』がつけられ、現在の富士吉田になりました。フランスの名峰モン・ブランと日本の名峰富士山のふもとにそれぞれ位置するのが縁で一九七八年に姉妹都市になりました。

次に同じ会報にシャモニに「ラスキンの像」があると書かれてありましたが、上高地のウェストン師のようなレリーフならあります。

場所はムースーの高台、旧レビュファ山荘から庭伝いに三〇〇メートルほど行ったブレヴァンのスキー・コースの下の林間、ラスキンが好きだったブレチェール針峰を谷越しに眺める《迷子石》にそのレリーフはめ込まれてあります。わたしにとっても好きな散歩場所でしたが、レビュファの山荘が人手に渡ってしまったので、ここは現在通れなくなりました。このレリーフまで誰でも行ける道順は、ブレヴァン行きのロープウエー駅の左、スキー・スタションという名の超安の民宿脇の小道の坂を登って行くと、標高一一二五メートルの目立たないところに、さびしげに横たわっている岩が『ラスキンの石』（Pierre à Ruskin）といわれているもので、見つけにくいかもしれません。《迷子石》を探していて迷子になりませんように。

なおラスキンがアルプスを眺めることが好きだったのはたしかで「いま回想してみて、すばらしい、賢明な日々をすごしたと言えるのは、モン・ブランや、モンテ・ローザ、ユングフラウなどを眼前に見てすごした日々だけだったと思う」と『プレーテリタ』の中で書いていますが、自分ではアルプスを登る意志がなかったせいか、登山行為には否定的で、一八六五年にウィンパーがエギーユ・ヴェルトを初登頂したニュースを聞くと、次のような悲嘆の叫びをあげ放っています。

「あなたがたは、地上の大聖堂を競技場に変えてしまった。そしてアルプス連峰を、熊の曲芸の際に使う、てっぺんに餌のついた棒のように思いこみ、それによじ登り、やがては、よろこびの叫びとともにそこから下りてくるのだ。かつて、あなたがたの詩人たちは、その同じ峰々を、熱烈な畏怖の念であこがれたものだったのに」（『胡麻と百合』一章）

慈恵医大山岳部 創設七十周年を迎える

濱口欣一

去る十月二十日、銀座第一ホテルで慈恵医大山岳部創設七十周年の祝賀会が催された。今年は槍ヶ岳診療所開設五十周年、ガネッシュ・ヒマール峰＝六九五〇メートル（慈恵医大創立百年記念学術登山隊、一九八〇年）初登頂二十周年に当たり、日頃お世話になっている大学関係者、山岳会関係者にお礼を述べるために山岳部並びにそのOB会である山の会が企画したものである。

慈恵医大からは岡村哲夫学長を始め関係者、槍ヶ岳診療所関係では穂刈康治社長を始め関係者、山岳会関係者は日本山岳会大塚博美会長他多数、他大学山岳部OB会関係者、また北アルプス南部地区遭難対策協議会小池強会長、遠く韓国から韓国山岳会孫慶錫元副会長も出席した。

記念式典で、日本山岳会会長大塚博美氏は、慈恵医大山の会は日本山岳会の活動に積極的に協力すると共に、戦後のヒマラヤ開拓時代から遠征隊にエクスペディションドクターとして参加し八千メートルの高々度においても医療活動にその本分を尽くしたと語った。

記念講演は槍ヶ岳山荘会長穂刈貞雄氏の「槍ヶ岳診療所の五十年」と題する講演であった。氏はその中で、慈恵の医師・看護婦・学生と手を携え守りぬいた「登山者の命」を語り、日本アルプス最高所・最深部という本診療所のもつ特異性はわが国山岳診療所にあって唯一無二のものであり、世紀を越えてその活動を支援したいと語った。

続いて大森薫雄会員がスライドを使用して、第一回の山岳部合宿が猪苗代でスキー合宿として行われて以来、山岳部、診療所の主な出来事を抽出して過去七十年の歩みを振り返った。

長尾悌夫会員が、山の会は戦前からヒマラヤ初登頂にその目標を定め、国家存亡を懸けた戦争時代を越え、戦後は杉本良一教授（生理学）のもとでヒマラヤ遠征への研究が行われ、一九八〇年の慈恵医大創立百年を期してネパールヒマラヤ・ガネッシュ・ヒマール五峰の初登頂へと登り詰めた道のりを語った。

記念祝賀会では、東京都山岳連盟

山本久子会長が、山の会会員が都岳連に協力していること、女性だけのインドヒマラヤ遠征隊（デオチバ）に山の会の先生が参加してくれたことなどを述べられた。農大・織内信彦氏からは、戦後大学山岳部がヒマラヤ遠征をする際、隊付きドクターをお願いする先鞭を付けたことが披露された。

歓談中には各大学関係者から、遠征隊に参加したメスを持たない医者の姿も披露された。

最後に大森薫雄が山の会を代表して、山岳部・山の会を今日まで見守った多くの山岳会関係者に感謝の意を述べ、「救急医療こそ医の原点であり、槍ヶ岳診療所を継続し慈恵精神を踏まえ日本の山岳界に尽くしたい」と締めくくった。（慈恵医大山の会）

山岳博物館散歩・・・・・・8

松本市アルプス山岳館

“岳都”松本市は、シンボルである北アルプスの山並みを西に望み、東には日本一高く、広く、美しい花の高原である美ヶ原高原の王ヶ鼻の垂直に切れ落ちた絶壁の山容を望見することができます。

アルプス山岳館は、市内から北へ4kmほど、標高差が200m弱の小高い山一帯に、自然と地形を生かした都市公園として整備されたアルプス公園内の一施設として建設され、昭和50年4月にオープンしました。

開館前より山岳会の皆さまからは、ご意見やご提案をいただき、寄贈、寄託していただいた多くの山岳関係資料を展示しております。これらの貴重な財産もさることながら、天与の自然美である周囲の山々の眺望も当館の誇る展示品の一つと自負しております。

現在松本市では平成19年に市制施行100周年を迎えるにあたり、アルプス公園整備拡張計画が進められ、記念事業として「花と緑と環境の祭典」が予定されています。これに合わせ、アルプス山岳館は施設の見直しを検討し、21世紀に向けて当館のあるべき姿を探るべく、整備基本構想の策定を進めております。生まれ変わるアルプス山岳館は、山の専門の方から公園を訪れる子どもまで幅広い層の皆さんが、山の魅力を共有できる施設を目指したいと考えています。

松本市役所観光温泉課・**土屋泰臣**

松本市立アルプス山岳館

開館時間：9時～17時
入館料金：大人100円、子ども50円
休館日　：毎週月曜日
　　12月1日～2月末日
交通機関：松本バスターミナルよりアルプス公園行きバス22分　松本駅よりタクシー15分、徒歩約1時間
問合せ先：松本市アルプス山岳館
　　TEL　0263－33－0707
　　松本市役所観光温泉課
　　TEL　0263－34－8307

モンゴルブルーの空と銀の星に魅せられて

坂倉登喜子

アルタイ山脈の小さな頂を目指して、エーデルワイスの咲く山へ登ったのは、平成十年の七月だった。

モンゴルブルーの空の美しさ、どこまでも続く大草原、そこに生きる放牧の群、エーデルワイスの花園。自然の美しさと、遊牧民の優しい心に触れて、私は九十歳になったら再びモンゴルへ行きたいと思っていた。

かねてからモンゴルの映画を撮りたいと話しておられた山岳映画サロンの伊藤弥八会長に同行し、私は卒寿記念としてもう一度モンゴル・フラワー山行を計画し、八月、二回目のモンゴルへ花の探訪となった。

八月十一日朝、羽田を出発し、ウランバートルのホテルに一泊。翌日モンゴル航空の国内線で西方の湖に近い町ウランゴムへ。さらに専用車で四時間走り、キャンプ地に着いた。今回基地にした山麓はウランバートルから四〇〇キロ西方のロシア国境近くに連なるハルヒラー山群の尾根続きである。その夜はゲルに宿泊しシュラフで安眠した。

翌日、キャンプ地の背後のピークへ登るべくゲルを出発。渓谷沿いの道を登り、橋を渡ると花の咲く急坂になる。小さな銀の星をちりばめたようなエーデルワイスが咲く斜面なので、花を踏まないようにして尾根にたどりついた。ここから頂上に続く稜線に取り付き、最後の登りをマイペースでたどり、ようやく岩峰に登ることができた。二八四〇メートルの頂上に立った瞬間、私の卒寿記念山行のために同行してくださった

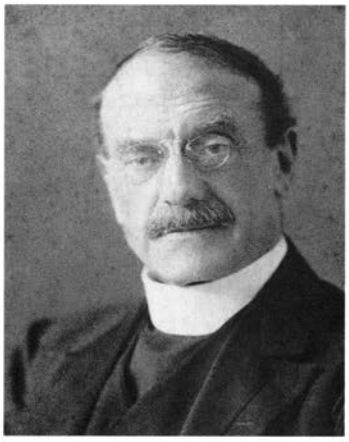
皆さんのお陰と、こみ上げてくる感激に目頭に涙がにじんだ。遠く氷雪をいただくハルヒラー峰（四一一六メートル）を仰ぎ見ることができた。

この山は、登り道も、頂上も、下り斜面も、ずっとエーデルワイスが咲いていて、まさにエーデルワイス・ピーク。同行の会員と喜びつつ、山頂で記念撮影をして花の道をゲルへ戻った。

ウェストン肖像写真の謎

田畑真一

昭和三年七月、ウェストンは銀行家だった大島堅造に対し、大小二枚の肖像写真を贈呈（島田巽ら「W・ウェストン年譜その4」『山岳』第八五年）した。そのうち、聖職服姿の大きな写真は昭和三十年ごろ、大島から日本山岳会に寄贈された。これは額入りだ。



山岳会本部に飾られているウェストン師の写真

大島は「私はウェストン師と文通していて、署名入りの写真を頂戴した。それは東京の日本山岳会本部に寄贈したが、今でも会議室に飾ってあると思う」（大島著『山の古典と共に』図書出版社）と書いている。

私は大島の四男、大島輝夫氏（本会会員）にうかがった。すると「あの写真は父が書斎の入口にかけていましたので、私は幼少のころより見て育った懐かしい写真で、父がこれを御茶ノ水のルームに持参したとき、ちょうど槙さん（田畑注、元会長の槙有恒）がおられ、槙さんにお渡ししたと帰宅して言っておりました」とのご教示だ。

大島が日本山岳会（以後、山岳会と表記）に寄贈した時、山岳会事務局は東京・御茶ノ水にあった。山岳会の御茶ノ水時代であり、織内信彦氏（名誉会員）の「お茶の水時代十五年」（『山岳』第八〇年）にくわしい。

その後の経緯は省き、現在の事務局には、例の写真がロビーの壁面に飾られている。私はウェストンから大島へ、大島から槙を通して事務局への経緯を偲んだ。

私は写真の裏面を調べた。すると「Swaine 146, New Bond St. W & SOUTHSEA」などの文字が印刷（活字体）されている。額に納められていたので、不明だった文字が見つかったわけだ。これにより、ウェストンはロンドンのニューボンド・ストリート一四六にあったスワイネ写真館で撮影していたことが判明した。

私はロンドンへ調査にいかれた三井嘉雄氏（本会会員）を煩わし、この写真館の存在の有無について調べていただいた。その結果、現地にはすでに写真館は存在せず、美術商の建物があった。建物の表示は「144/6 partridge (Fine Arts PLC)」とあり、三つの地番にまたがっていた。ニューボンド・ストリートといえばウェストンが講演などで活躍したいろいろな関係の建物が思い出され、これらが周辺に点在していた。たとえば王立地理学協会があったし、アルパインクラブも近くにあった。

だから、ウェストンにとっては馴染みの地域だったことになり、その付近にあった写真館で撮影した点も納得がいく。

なお、写真と台紙とを留めている小さなシールがあり、これには「大阪堺筋三越前錦水堂額縁店電話本局一〇一五番」との文字が印刷されている。額縁の裏面にも、同じ文字のラベルが貼られている。大島は関西方面で活躍した銀行家だったので、なるほどと思えるシールやラベルだ。錦水堂額縁店で求めた額縁だったとも断定できよう。

ちなみに島田らは「大島とウェストンの交友についてはよくわからない」（前掲文献）とする。しかし、大島は「私はウェストン師と文通していて」（前掲文献）と書いている。

私は大島家に現存するウェストン書簡（所蔵・大島輝夫氏）を調べさせていただいた。それによって見るだけでも、昭和三年七月九日から昭和十二年七月二十九日までの九年間にも及ぶ。長い文通期間があったことが判明するのだ。

最後に付言せねばならないことがある。写真の資料的経緯につき、山崎安治（元常務理事）が関心を示し、輝夫氏に対し、山岳会会報に経緯を書くよう、勧めたことがあったという。しかし輝夫氏は、書くことはなかったとのことだ。

私は上記した先人各位の尊い事績、感慨に対し、思いをはせた。そして輝夫氏の了承を得、発表させていただいた。

別記・本稿をまとめるにあたり、中村純二氏（元副会長）の配慮を得た。記して謝意を表します。なお、先人のお名前を敬称略とさせていただきました。

図書紹介

イラスト　蜂谷益雄

日本山岳会秋田支部・編
『㈳日本山岳会秋田支部設立四十周年記念誌』

秋田支部は一九五九年に設立され、九九年十一月二十日、設立四十周年記念式典が挙行された。本書は、その四十周年を記念して、設立から記念式典までを記録したものである。

主な内容は、支部設立の経緯と初期の活動、会員名簿、会員列伝、支部年表、四十周年記念事業などであるが、本書の特色は「日本山岳会秋田県関係会員名簿」であろう。支部に在籍した会員のみならず、秋田県に関係のあった会員をすべて拾い出している。そして「会員列伝」ではそれら会員の経歴を可能な限り調べ上げている。たとえば日本画家の平福百穂氏、名誉会員で日銀秋田支店長を勤めた藤島敏男氏などが登場。中村テル名誉会員については「北海道の生まれだが、両親とも秋田市出身。大祖父が秋田藩の家老、勘定奉行の渋江内膳で…」と紹介されている。

こうした企画は、支部設立メンバーの一人である保坂隆司会員が現在は熱海市に在住していて、本会図書室に足繁く通って調べることができたという。人的条件に恵まれた事情もあるが、今後、他支部においてもこのような取り組みを通じて各県における古い会員の経歴が明らかにされるならば、本会百年史の好個の資料となるであろう。　（南川金一）

二〇〇〇年三月　日本山岳会秋田支部発行　一三一ページ

秋月俊幸・著
『日本北辺の探検と地図の歴史』

ベーリング海やオホーツク海を含む北太平洋の西北部は、十八世紀末頃までも、南北両極地を除けば、地球上で最も未知で不明確な地域、海域であった。なぜこの地や海が永く未知のままで残されていたかというと、一にここには金銀香料の類がありそうもないと、世界の権力者や資産家、航海者に思われ、彼等の興味を引かなかったからである。それでも、この地域に金銀島という名の島があるという風説に引き寄せられ、十七世紀中葉に、この島を探索するためオランダの航海者フリースが訪れたが、金銀島なぞ見つけることはできず、その航海も徒労に終わったのである。

もう一つの理由はこの海域に異常発生する濃霧が探索を困難にさせたということができる。探検が行われないままに十七世紀頃より、地図が作られ始めたものだから、今からすれば奇々怪々な地図が洋の東西を問わず出版され、カムチャツカ半島、千島、北海道、アラスカなどがごちゃ混ぜになって地図上に描かれた。

これらの地図作成の歴史を書いた類書に「北方図の歴史」（船越昭生著講談社）があるが、さらに詳細にこれらを記述し、百七十枚を超える地図を収録したのが本書である。収録された地図には目新しいものは少ないが、従来の研究書（和洋を含め）に掲載されている地図がほとんど網羅されていて、言わば、日本北辺地図事典ともいえる浩瀚な書物になっている。　（田村俊介）

一九九九年十一月第二刷　北海道大学図書刊行会発行　四〇五（本文）プラス四四ページ　地図一七〇枚　八千三百円

堀　公俊・著
『日本の分水嶺』

わずかな距離の違いに降った雨粒は、お互いに異なる方向に流れ、異なる海域に注ぐ。この運命の境界線「分水嶺」は、文学作品や日常の比喩としてしばしば用いられる大変響きのよい言葉だ。そこはかとなく郷愁を感じるこの分水嶺は、しかし実際それがどこにあるのか、正確に知る人は意外と少ない。一般の地図はもちろん国土地理院の地形図にも記載されていないからだ。この分水嶺という見えない線は、さまざまな人間生活や環境に関わりをもっていたことを、本書によって改めて知ることができ、日本列島の縮図を垣間見ることができる。

自然保護などにも関わっている著者は、全国を気ままに訪ね歩く旅行者の一人と自述しているが、この日本列島の大分水嶺を鳥瞰的にトレースし、そこに関わるいろいろなジャンルの話題をわかりやすく軽快に紹介しながら、じつは、われわれ自身が今まさに、時代の分水嶺に立っていることを、強く訴えたかったのではないかと思う。山旅の途上、湧き水や小さな沢に出会ったら「この流れはどこに行くのだろう？」と、ちょっと立ち止まって考えてみること

から、一味異なった山の楽しさが生まれてくる。そんなヒントの詰まった分水嶺ガイドである。**（近藤善則）**

二〇〇〇年九月　山と溪谷社　二七一ページ　千七百円

H・ハラー・著　長谷見敏・訳
『新編　白い蜘蛛』

アイガー北壁初登攀者の一人ハラーが同名の著書を上梓したのは一九五八年。その四十一年後に刊行されたこの「新編」を旧版の増補・改訂版のたぐいだと思ったら大間違い。これはアイガー北壁（とグリンデルワルト）に視座を据え、ほぼ一世紀にわたる世界のアルピニズムの流れを定点観測した、極めてユニークな登山の文化・思想史である。

もちろん前史から初登攀を経て現代にいたる、数々の特徴的な北壁登りの臨場感あふれる描写にもこと欠かず、登山記としても第一級の面白い読み物になっているが、老いてますます思索に磨きのかかった著者の批判的かつ複合的なまなざしのおかげで、個々の登攀（と遭難）が全体の歴史の中に見事に位置づけられる。故田口二郎氏がこれを読んだら膝を打ったことだろう。**（平井吉夫）**

二〇〇〇年九月　山と溪谷社発行　五二五ページ　二千四百円

図書受入報告（2000年10月）

著　者	書　　名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
綾野まさる	野口健:最高峰でつかんだ未来(シリーズ・素顔の勇者たち)	151pp/20cm	旺文社	2000	野口健氏寄贈
野口健・白石康次郎	大冒険術:ぼくらはなぜ世界に挑むのか	221pp/20cm	文藝春秋	2000	著者寄贈
城所邦夫	登山者のための観天望気(New Yama Books No.15)	221pp/18cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
高野佐知　編	ネパール登山隊登山報告書1994:ドルジェラクパ峰	23pp/26cm	学習院山桜会	1996	浜崎慶治氏寄贈
大蔵喜福	マッキンリー気象観測機器設置登山隊11年の記録	177pp/29cm	日本山岳会科学委員会	2000	著者寄贈
日本山岳会東九州支部(編)	日本山岳会東九州支部創立40周年記念誌	87pp/26cm	日本山岳会東九州支部	2000	発行者寄贈
日本山岳会三水会(編)	25年のあゆみ	148pp/22cm	日本山岳会三水会	2000	発行者寄贈
藤本一美・他(編著)	車窓展望の山旅:鉄道で楽しむ山	221pp/20cm	実業之日本社	2000	出版社寄贈
日本山岳会宮崎支部(編)	みやざき百山	216pp/22cm	宮崎日日新聞社	2000	編者寄贈
野村董夫	ヒマラヤ巡礼:ネパール8000m 8座をめぐる山旅	84pp/25cm	東京新聞出版局	2000	出版社寄贈
手塚宗求	山をめぐる人と書物	188pp/20cm	恒文社	2000	著者寄贈
斉藤一男	日本の岳人たち	493pp/19cm	岩峰社出版部	2000	著者寄贈
桑村誠二郎(編)	東京写真大学山岳部50年の足跡:1950年から2000年へ	138pp/27cm	東京写真大学山岳部	2000	発行者寄贈
ＨＡＴ－Ｊ(編)	Take in Take out :山岳の環境を汚染しないために	80pp/19cm	ＨＡＴ－Ｊ	2000	発行者寄贈
吉武玲子	聳のみち	264pp/22cm	若葉社	1999	宮下啓三氏寄贈
日本勤労者山岳連盟(編)	登山と自然の科学Ｑ＆Ａ	221pp/21cm	大月書店	2000	出版社寄贈
中央大学山岳部(編)	中央大学山岳部平成12年度５月合宿横尾尾根遭難事故報告書	95pp/30cm	中央大学山岳部	2000	発行者寄贈
環境事業団地球環境基金部(編)	地球環境基金活動報告集(平成10年度)	206pp/30cm	環境事業団	1999	JAC自然保護委員会寄贈
Bonington, Chris et al.	Tibet's Secret Mountain : The Triumph of Sepu Kangri	254pp/25cm	Weidenfeld & Nicolson	1999	購入
Maraini, Fosco	Meeting with Japan	467pp/24cm	Viking Press	1959	購入
Scott Berry	A Stranger in Tibet : The Adventures of a Zen Monk	309pp/20cm	Indus	1995	購入

会務報告

十月理事会

日時　十月十一日　十八時三十分～

場所　日本山岳会会議室

［出席者］　大塚会長、小倉、竹内各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、村井(葵)、宮下、鰺坂、高遠、坂井、河西、松原各理事、中村監事、中川、平山、平野各常任評議員

［委任］　大森副会長、増山、勝山、坂本各理事、神崎監事、田邊、吉永各常任評議員

【審議事項】

一、会員アンケート・その三（西村）

　会員アンケート実行委員会が作成した「実施案」に対する説明。承認

二、K2登山隊（一九九六）のビデオフィルム使用許可願い（西村）

　九月理事会の要請により確認した。NTGはナショナルジオグラフィック社の関連会社である。中身でナレーション、音（BGM）を除くことを条件とし、本ビデオの著作権が本会であることを確認。　承認

＊外国に資料を貸与する場合に備え、使用料請求、条件設定などを検討しておく。

【報告事項】

一、平成十二年度永年会員予定者は長富修吉、金澤守恭、雨宮淳三、鈴木康義、徳久球雄、野田三郎、青木巌、赤羽孝一郎、加藤輝一、早乙女緩次、大場摂雄の十一名。

二、本年の年次晩餐会の企画（西村）

　十二月二日、東京新高輪プリンスホテルで開催の年次晩餐会企画は、展示＝「山岳写真展」、報告＝「アルバータプロジェクト二〇〇〇」、「第三回秩父宮記念山岳賞受賞者記念講演」（予定）、フォーラム＝「JACが挑んだ世界最高峰への足跡」を予定。その他例年通りバー・コーナー、JACグッズ販売、翌日の記念山行（千葉県富山）。会費は一万五千円。

三、平成十二年度（第三回）秩父宮記念山岳賞の審査中間報告（竹内）

　九月二十五日、第一回審査委員会を全委員参加で開催。委員長に木下是雄氏を推薦し（大塚会長より委嘱）三件の推薦書類審査を行った。

①「山岳地の環境保全と災害防止に係わる大気科学の研究」吉川友章氏。②「大峯・行仙宿山小屋建設」玉岡憲昭氏。③「十一次にわたるマッキンリー気象観測登山隊による若手登山者育成」大蔵喜福氏。

　なお①、②は昨年度応募案件。

四、資料借用願いの報告（西村）

①㈱山と溪谷社より「山岳」三二年より六九ページ黒部下部奥山概念を「山と溪谷」十一月号へ転載する。

②㈱スタジオアルタより「日本隊エベレスト初登頂」のオリジナル写真を、TV番組「ミス・インターナショナル世界大会の歴史を紹介する際同時に世界の歴史を紹介するとき」に使用、放送する。

③名古屋市教育委員会より「チョモランマ未踏の北壁、登頂成功」の写真を、新成人への記念アルバムに使用。

五、委員会報告

総務委員会・高原

　新入会員オリエンテーションを九月三十日午後二時より会議室で開催対象百十二名中二十二名が出席。

財務委員会・村井（龍）

①月度の会計報告。

②百周年の予算措置として毎年五百万円（総額二千五百万円）は実現可能。

③ネパールシバプリ四十万円の使用内訳の報告があった。

④図書管理小委員会より、図書室で打ち合わせをしているグループがあるので図書閲覧の場の徹底を要請。

会報編集委員会・村井（葵）

①十月号は「アルバータ」特集がトップ、その他北九州支部設立など。

②九月号「報告」コーナーの図書委員会の記事に一部誤りがあった、お詫びし訂正をする。

海外登山委員会・西村（増山代理）

①十月二十八日、カナダ山岳会主催の晩餐会に招待され大森副会長を派遣。当会の晩餐会にはカナダ山岳会会長を招待したい。資金はアルバータ二〇〇〇の会計より捻出する。

②十月六日、増山はボリビア山岳会を訪問し、プリエト会長に面接。

高所登山研究委員会・坂井

　十一月十八日十二時三十分より、東京体育館第一研修室においてシンポジウムを開催。八千メートル峰登頂者を対象としたアンケート結果の発表（山本正嘉氏）、多様化する高所登山の価値観を踏まえ今後の展開を坂下直枝、谷川太郎、北村敏之各氏をパネリストに迎えて行う。コーディネーターは江本嘉伸氏。

学生部指導委員会・宮崎

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで
全国ネットの山旅専門店！
安全で快適な山旅を。中高年からお一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。
おすすめオリジナルプラン手配OK
人気の山旅スタイル。気軽にお問合せください。
2000年秋からの
やまびこクラブスタート
大好評！初心者の為の山歩き講座。各地発着のプランをご用意しました。
2001年度カタログもご予約ください。
アミューズトラベル株式会社
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエービルB1
☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258
大阪06(6456)3366 名古屋052(588)5617
福岡092(414)5566 広島082(502)2525

①十一月十八日十五時より、東京体育館第一研修室において、大学山岳部監督会議を開催。テーマは「スポーツ・クライミングとアルパイン・クライミング」、「高校登山の現状と大学山岳部への関わり」、「カザフスタンの山々の紹介」を予定。②韓国大学山岳連盟より誘いがあり検討中だった「日韓学生友好登山」を韓国の大学山岳部との交流およびインスボンにおけるフリー・クライミングを目的として、十月十六日より二十三日まで韓国で実施。日本側は学生四名、学生部指導委員二名。

山研運営委員会・坂本

一般利用は十月二十七日までとし二十八、二十九日で閉所。九月末までの宿泊利用者数は七百四十人。

科学委員会・森

シンポジウム「登山者の立場から山のトイレ問題を考える」を自然保護委員会と共催で、十一月二十五日東京都高年齢者就業センター（飯田橋駅徒歩七分）で開催する。

図書委員会・宮下

十月二十七日、講演会「七十五年前と今日のアルバータ」を山田二郎元会長を講師に開催する。

自然保護委員会・河西

①自然保護委員会全国大会を福井支部の協力で十月十四日、福井県大野市で開催。竹内副会長ほか八十名が出席予定。十五日は荒島岳に登山。②「山岳会の森」構想に関する㈳国土緑化推進機構よりの補助金二百万円は、自然保護委員会河西名義の口座を作り川越委員が管理する（村井財務担当とは打ち合わせ済み）。③十月十八日、現地を視察し、作業候補地を決定する。十月二十八日、参加者二十二名で現地作業の予定。

医療委員会・西村（増山代理）

十月一日より五日までチリのアリカにおいて「登山医学と高所生理学に関する国際会議（クラウス・ベーン会長）」が開催され、増山、中島、滝、新井が出席。国際登山医学会（ISMM）の総会も行われ、会長にハケット氏（米国）、アジアを代表する副会長に中島道郎氏が選出された。

アルバータ・西村（増山代理）

九月二十六日、新宿中村屋で八月の登山、トレッキングの打ち上げが行われ、大塚会長、大森実行委員長ほか、熊崎登山隊長、トレッキング参加者など約五十名が参加した。

その他

入会者が減っていることに関して具体策をという中川評議員の意見に関してのさまざまな発言があった。①若い人の会費を安くして、若年層を増やしたい。②アメリカ山岳会は入会に推薦者不要。③魅力ある山岳会とは　例・登山四団体統一保険制度、会員は安く物が購入できるなど。④アメリカ山岳会はクラブ組織から企業組織に変えた。⑤会員を増やすには会の基本事項まで少しずつ変えていく必要がある。⑥大学が所有している山小屋が使える。⑦在日外国人にも山好きがいる。⑧高校、中学の生徒を山に連れてゆく講師役を。⑨会員がTV局、新聞社などとタイアップして講師をし、入会者を。⑩「青年部」だけでなく「中高年部」も必要では。⑪会のあるべき姿を平易な言葉で表現。⑫理事会で「高齢化、入会者減少化」をテーマに徹底討論など。

■会員異動

物故

高木律生（一三一一五）00・9・25
相川　修（三九〇〇）00・9・29
水野公男（五五三四）00・10・11
中川公夫（八〇一二）00・10・15
相山之良（四四三一）00・10・19
会田　東（一〇一二一）00・10・20
西尾　聡（一〇三〇〇）00・10・24

ルーム日誌

10月

2日　総務（委）
3日　高所登山研究（委）　学生部　新日本山岳志編集（委）　アルパインスケッチ（ク）
4日　フィルムビデオ（委）　三水会　トイレシンポ（小委）　99同期会
5日　資料（委）　フォトビデオ（ク）
6日　財務（委）　学生部　海外連絡（委）
7日　土曜会
10日　常務理事会　自然保護（委）　アルパインスケッチ（ク）
11日　理事会　会報編集（委）　97同期会　ジャック93会
12日　青年部　山の自然学研究会　95同期会
13日　アルパインスキー（ク）　00同期会
16日　総務（委）　山げらの会
17日　図書（委）　集会（委）
18日　秩父宮記念山岳賞審査（委）　山研運営（委）
19日　科学（委）　学生部　アルパインスキー（ク）
20日　総務（委）　高所登山研究（委）
23日　自然保護（委）　緑爽会
24日　99同期会
26日　インターネット（小委）　学生部　98同期会　土曜会　フォトビデオ（委）
27日　図書（委）　秩父宮記念山岳賞審査（委）
28日　評議員会
30日　総務（委）　フォトビデオ（委）

10月来室者599名

INFORMATION

イラスト・村上直温

◆山岳図書を語る夕べ

図書委員会

北海道斜里町にある「北のアルプス美術館」は山の文学・美術を対象にしたおそらく日本で唯一の文学館・美術館です。そのユニークな活動はまったくの個人によって運営されています。今回は責任者である館長の山崎さんをお招きして、その内容、経緯、展望などをお聞きします。極めて稀な機会ですので、多数のご来場をお待ちします。

日時　二〇〇一年一月二十九日(月)十八時三十分～

場所　日本山岳会集会室

講師　山崎　猛氏

◆アイスクライミング講習会

指導委員会

恒例のアイスクライミング講習会を下記の要項で開催いたします。講師には日本のアイスクライミングの第一人者である溝渕三郎氏ほかをお招きし、経験に裏打ちされた確かな技術を伝授していただきます。

これからアイスクライミングをはじめようという方、アイスクライミングの基礎技術を学び直したいという方にはまたとない機会だと思います。初級者から経験者まで、どうぞふるってご参加ください。

日時　二〇〇一年二月三日(土)～五日(月)　※中途参加も可

場所　八ヶ岳　赤岳鉱泉周辺

内容　アイスクライミングの基礎技術全般

講師　溝渕三郎、松原尚之　他

参加費用　二万五千円を予定（宿泊費・食費含む）学割あり

申込　参加を希望する方は郵便またはファクスで松原尚之（指導、遭難対策、青年部担当理事〒一六四－〇〇一四　東京都中野区南台四－二－五　金井方　Fax〇三－三三八三－六〇三四）宛

＊資料、申込用紙等を送付します。

◆スキー懇親会のお知らせ

集会委員会・山形支部共催

例年、成人の日に開催していたスキー懇親会ですが、今年は日程を変えて開催します。開催地は山形蔵王スキー場、山形支部の蔵王での恒例行事と合流しますので、腕に自信のある方は支部の方々とのツアーにも参加できます。

日時　二〇〇一年二月十日(土)～二月十二日(月)

費用　二万六千円程度を予定

宿泊　蔵王中央高原片貝湖畔「蔵王パラダイスロッジ」

現地集合・解散

申込　一月十日までに会員番号、住所、氏名、年齢を明記し、ハガキかファックスで、勝山康雄へ（〒三三四－〇〇五七　川口市安行原一二六二－三五　Fax〇四八－二九四－九六四六）

◆第八回「初詣山行」

99同期会

日時　二〇〇一年一月七日(日)

場所　丹沢大山

集合　小田急線秦野駅　九時

行程　秦野―蓑毛―大山―日向薬師

申込　一月四日までに、氏名、会員番号、連絡先を明記の上ハガキかファックスで森啓宛（〒二〇一－〇〇〇五　狛江市岩戸南三－一三－六　Fax〇三－三四八八－四六七〇）

◆ストレッチ＆トレーニング講座

山げらの会

「筋肉痛よさようなら、楽に山に登りましょう」をテーマに毎月一回十八時三十分より、ルームで簡単な筋トレとスットレッチを行っています。日取りなど問い合わせは三井（TEL＆Fax〇三－三四五一－五三八八）までお問合せください。

■訂正　十月号（六六五号）一九ページの短歌「岩肌の苔滑る水脈に陽の散りて黒髪の滝とわれは叫びにき」は「……**呼び**にき」の誤りでした。お詫びして訂正します。

十一月号（六六六号）一〇ページ最終行の「http://www/p2pnaoki.com」は「…www.p2p…」の誤りでした。

❖編集後記❖

「山」十月号に「山の日」制定を望む、と題した投稿を掲載しました。既に日本アルパイン・ガイド協会が平成七年九月十六日付で、十月三日を「登山の日」として日本記念日協会、一三七号の正式認定記念日として登録しています。当会にも推進運動の協力要請があったことをお知らせしておきます。

いよいよ歴史の大きな分水嶺を越えて新世紀に入ります。会員の皆さまの無事なる峠越えと、クラブのさらなる発展を祈ります。**（村井　葵）**

日本山岳会会報　山　667号

2000年（平成12年）12月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
ホームページ:http://www.jac.or.jp
E-メール:jac-info@jac.or.jp
発行者　大塚博美
編集人　村井　葵
印　刷　株式会社　双陽社